

## 黒岩大助氏の死を悼む

気象学会賞2回目の受賞者、黒岩大助氏は去る昭和58年10月28日、閉塞性黄疸のため逝去された。

氏は大正5年高知県に生まれ昭和15年東京物理学校(現東京理科大学)を卒業して電気試験所に奉職し、当時誕生したばかりの電子顕微鏡の研究に従事した。雪の結晶の昇華核の重要性を見越していた中谷宇吉郎先生に招かれて昭和18年北大低温研究所の助手となり、翌年から始まった千島・根室地方の海霧の研究に参加して霧粒の核の電子顕微鏡撮影に挑戦して世界で始めて成功した。根室で霧粒子の根拠をトレーガーでサンプルして、不自由な鈍行列車を取りついで3日ばかりで東京まで運び、製作されたばかりの日立の電子顕微鏡の1号器で撮影に成功したわけであるが、その成果は日立の電子顕微鏡による科学論文の第1号となった。

霧粒の核は海塩粒子であろうことは既にケーラーにより予知されていたが、電子顕微鏡写真に立方晶形の根拠を眼のあたりにした時の感動は、側でみても充分同感されるものであった。この手法により海塩粒子のみならず燃焼生成物、土壌粒子や微生物までが雲粒の核となることが実証されて、当時発足したばかりの雲物理学に大きな貢献をもたらした。この業績により昭和30年、気象学会賞が与えられたが国際的にも誇り得るものである。

氏は電気試験所在職中に電子顕微鏡に関する小さな解説書をかいた。この書に触発されて電子顕微鏡の製作所を興して成功を取めたさる会社社長から、後年立派な錦絵を贈られたことがよほど嬉しかったらしく、飲む機会があるとよく自慢話をきかされたものである。

昭和30年代から氏は積雪の研究に転じてその誘電的性質、内部摩擦、氷粒の焼結、氷面の腐蝕と転位の移動や電線の着氷・着雪などに多くの独創的な業績を残したが、何れもこの分野の先駆的役割を果たしたものである。これら一連の業績に対し昭和42年に日本雪氷学会賞がおくられた。

低温科学研究所の教授として、役目から、雪氷の応用



面にタッチする機会も多かったようである。たとえば札幌の冬期オリンピックでスキーやポップスレーのコースの設置・保全の研究面を担当して同オリンピックの成功に陰ながら貢献した。オリンピックが近づくと氏の研究室へスイスなどの外国から多く関係者が雪質の相談に来たのに日本から1人も来なかったと苦笑していた。

氏は事あるごとに学術の応用には基礎的研究が土台とならなければならないことを強調していたが、中谷流の研究の一つの重要な受け止めかたと思う。氏の雲物理学や雪氷物理学における独創的な研究に対し昭和53年に北海道科学技術賞、55年に紫綬褒章がおくられた。

これと言った楽をたしなまなかった氏が、こよなく愛したのは花卉の栽培であり、晩年は種子から育てる高山植物に眼がなかった。筆者にも弟子入りを熱心にすすめてくれたが果たさなかった。心のこりなことである。

病床で死の直前まで紙と鉛筆を離さなかった由、仕事の面でも言いのこしたことが多かったのであろうか。まことに土佐男子にふさわしい見事な最期であった。

(孫野長治)